

テーマ：『 豊かな表現・思考と授業の構造化を試みる理科・生活科の研究 』

相模原市立 大野小学校

Tel. 04 2-7 4 2-

担 当 西岡 盛男

3 2 2 6

者：



#### ■実践内容：

上の写真の実践では、理科5年「流れる水のはたらき」の学習で、学区の東端にある「境川」へ児童が実際に行き、河川改修後の川の様子や河川改修前に流れていた跡などを見学した。その見学から、なぜ川の西側に東京都の土地、東側に神奈川県のあるのかということや、なぜ河川改修をして直線的な流れにしたのかということに疑問をもった。自然現象の中から「おやっ?」「変だな?」という浅い問題意識を児童が持った場面である。

次に、古い地図と新しい地図を比較して、旧河川の流れと都県境が殆ど一致することに気づき、河川改修をすることが、何のためだったのかということが問題になった。そこで、児童は、洪水を防ぐために改修したのだという考えと、直線的にした方が洪水になりやすいのではという考えが対立し、流水実験で確かめることとなった。

流水実験の結果、曲がった流れだと洪水が起きやすいことは分かった。しかし、水を流した跡を見て、水が土地を削っていくかどうかで意見がまた分かれた。そこで、また流水実験をして、流れる水の働きに着目していった。

#### ■実践成果：

この実践から、児童が同じものを見てもその捉え方の違いや過去の経験の違い、個性の違いなどから意見が分かれるところが出てくることが分かる。児童は、どちらが正しいのだろうということ、実験などで調べようとする。これを「対立場面」として捉えて、授業が児童の追究意欲によって進められていく原動力になる場と考え大切にした。上の例のように、調べた結果から、「分かったこと」が出てくるが、その中に「さらに分からないこと」が一緒に出てくるように、授業を構造化することもできた。

この過程を細かく分析すると、弁証法的発展過程になっていることが分かった。洪水になるかどうかという視点から、さらに水が土地を削っていくことへ追究の段階が高まっている。このように、他の理科の授業でも生活科でも授業を対立が次々と解消され、追究が発展していくように構成していくことの重要性は認識できた。

また、子どもたちにとって、「私は〜と思うけれど、一体どっちなのだろう」と自分の中に複数の考え方が同時に入っている状態(子どもの自己矛盾)を大切にすることも認識できた。

#### ■実践ポイント：

「分かったけれど、まだ分からない」が出てくるには、弁証法的に発展していく授業の構造も大切であるが、学級経営の大切さもポイントとなった。また、児童の話し合いが弁証法的発展過程となることにより、共に友達のよさを認めながら、互いに助け合い、補い合いながら活動をしていくという社会性(生きる力)を身につけることもポイントとなった。